

城崎こども園 最優秀園 実践発表会 開催レポート

2026年6月4日（木）、2025年度ソニー幼児教育支援プログラム最優秀園の城崎こども園において、最優秀園 実践発表会を開催しました。

発表会概要

1. 日時：2026年6月4日（木曜日） 9:15～16:30
2. 会場：第一部 城崎こども園
第二部 城崎アート国際センター
3. 主題：「はじめての発見が生まれるとき」～0・1歳児が五感で味わう身近な環境との出会い～
4. プログラム
 - 1) 公開保育
 - 2) 研究発表
 - 3) ポスター発表
 - 4) 秋田先生と大豆生田先生のおしゃべり会
 - 5) グループセッション
 - 6) 講師と園職員とのおしゃべり会



第2部会場 城崎国際アートセンター

公開保育

第一部では、本園の園庭や室内を会場に、0歳児から5歳児までの異年齢の子どもたちが自然に交じり合い、思い思いの場所で遊び込む姿を公開いたしました。かつて園庭にあった大型の総合遊具を撤去して整備した「芝山（斜面）」や泥コーナーなど、子どもたちが自ら環境に働きかけられる「余白」を大切にされた環境のもと、子どもたちがのびのびと遊ぶ姿をご覧ください。

偶然できた水たまりに40分近く夢中になり、ボールを落として水しぶきを上げたり、水の浮力や跳ね返りを楽しんだりする姿など、五感を通じた探究のプロセスが見られました。また、年齢の異



なる子ども同士でビールケースやソリ、パイプなどの多様な素材を斜面に持ち込み、何度も転がして試行錯誤する様子も公開しました。参加者の方々からは、「3歳未満児が3歳以上児に交じって長時間遊び込んでいる」「子どもたちが場を知り尽くして遊んでいる」「保育者が口を出しすぎず『引き算の関わり』で見守っている」といったご感想をいただきました。

また、午後のポスター発表の内容も掲示し、参加者に事前にご覧いただきました。



園内にポスターを掲示

研究発表



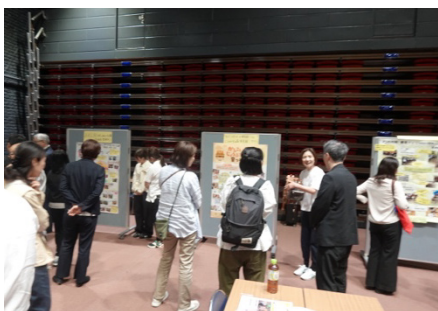
第二部では、「こどもの育ちを丁寧に記録する」ことを軸とした本園の保育ドキュメンテーションの取り組みについて、副園長中尾繭子が発表を行いました。まず、0・1歳児が偶然できた水たまりで水しぶきを上げたり、斜面でフープや椅子を転がしたりする動画を紹介し、子どもたちが身体感覚を通して原因と結果を探り、世界と出会い直している姿を共有しました。こうした子どもの「はじめての発見」や「面白センサー」を見逃さないため、本園では「どこだれ記録（どこで、誰が、何をして遊んだか）」等のDaily（毎日）の記録を土台とし、Weekly（毎週）、Monthly（月ごと）、Period（学期ごと）へと積み重ねています。OneNote やルクミー等のデジタルツールを活用してチームで記録を共有し、子ども一人ひとりの育ちを多角的に捉え、次の保育へと繋げるプロセスをお伝えしました。また、会場後方に2025年度の最優秀園、優秀園の論文、講師の著書などを展示し、自由に閲覧していただきました。



優秀園の論文を会場後方に設置

ポスター発表

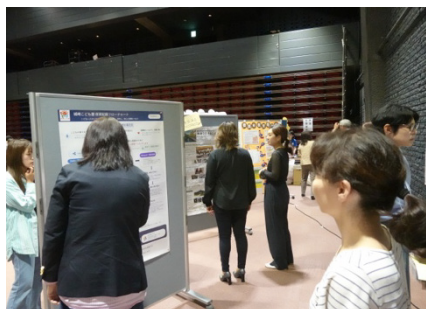
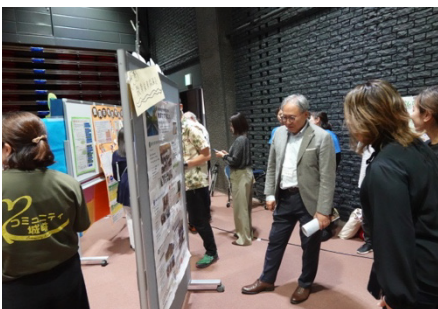
昼食休憩を挟み、本園や地元の豊岡市立城崎小学校をはじめ、2025年度保育実践論文の最優秀園、優秀園、計14団体によるポスター発表が行われました。各園における「科学する心」を育む特色ある実践や、小学校との架け橋プログラム、幼保こ小中連携などの取り組みがポスターで共有され、参加者同士で活発な意見交換が行われました。ポスター発表には豊岡市の門間雄司市長、能登琢也教育長も駆けつけていただき、ポスターをご覧になったあと、参加者に対して歓迎のご挨拶を賜りました。



門間雄司豊岡市長



能登琢也教育長



秋田喜代美先生と大豆生田啓友先生によるおしゃべり会



講師の秋田喜代美先生と大豆生田啓友先生

講師である秋田喜代美先生（学習院大学 教授）と大豆生田啓友先生（玉川大学 教授）に、公開保育での子どもの遊びの様子を写真や動画で振り返りながらご講評をいただきました。秋田先生からは、本園の環境が「素材や空間が答えの先回りをしない『余白』」を持っていることや、保育者の「引き算の関わり」を評価いただきました。大豆生田先生からは、偶然がもたらされる環境の面白さや、子どもがあちこちへ移動する豊かさ、斜面にビールケース等の多様な物を持ち込んで遊ぶ姿に触れ、0・1 歳児からいかに豊かな科学的探究が行われているかを専門的な視点からご解説いただきました。

グループセッション

田島大輔先生(和洋女子大学 准教授)をファシリテーターとして、「科学する心」の視点から「身近な環境や世界との出会い」「発見・気づき、探求・試行錯誤」の観点で参加者の皆様、本園の職員が小グループに分かれて対話を行いました。公開保育で見た子どもたちの姿をもとに、「大人中心の保育から子ども中心の保育へと転換していく中での葛藤」や、「安全管理と見守る保育のバランス」、「子どもが自分で遊びを選び深めていける環境づくり」について意見が交わされました。また、小学校との接続についても話題に上がり、幼小の教員が共に子どもの姿を語り合いながら接続していく重要性が共有されました。



3分野20グループでのセッション

講師と園職員のおしゃべり会



ファシリテーターの田島大輔先生



登壇者だけではなく城崎こども園職員も自分の言葉で保育を語る

最後に、講師の先生方とファシリテーターの田島大輔先生を交え、主幹保育教諭など本園の職員が登壇し、参加者との質疑応答や現場のリアルな声をお届けするおしゃべり会を行いました。大人中心の保育から子ども主体の保育へシフトするプロセスとして、安全管理の観点から思い切って大型遊具を撤去した際の、理事長や園長の苦渋の決断と、それに伴う職員の葛藤が率直に語られました。また、日々の遊びの振り返りから子どもの声を取り入れたエピソードとして、「初夏キャベツのお好み焼き作り」のために地元の豆腐屋へ買い物に行った話や、「子どもたちが手作りした城崎のマップ」の話などが現場の先生から語られ、子どもを中心とした保育の面白さが共有されました。会場全体が温かい共感と笑いに包まれ、充実した発表会は幕を閉じました。



参加者からの質問

総括：「科学する心」を育むために

城崎こども園の実践は、「科学する心」が決して特別な知識の習得ではなく、子どもが環境と出会い「何だろう」「やってみたい」と感じる瞬間から始まることを、参加者に示したものです。特に0・1歳児が偶然できた水たまりや泥、風といった身近な環境において、五感を通して世界を感じ、確かめていく過程には、すでに豊かな「科学する心」の萌芽が存在しています。

「やってみたい」「もう一回」と子どもが環境に働きかけ、感じ、試し、驚き、また確かめる。そのような「はじめての発見」が生まれる小さな瞬間の積み重ねが、豊かな感性と想像性を育み、「科学する心」の確かな土台となっていくことが実感できる発表会でした。

この発表会は、大人が答えを先回りして教えるのではなく、子どもの内なる「面白センサー」を見逃さずに探究を共に面白がり、引き算の関わりで丁寧に見守り、細やかに記録していくことの重要性を私たちに問いかけるものでした。0歳児から豊かな科学的探究が行われているという事実が、多くの参加者にとって「本当の子ども主体とは何か」を問い直し、自園の保育を見つめ直す大きな契機となれば幸いです。